



避難用の舟▶

背景

肱川は、愛媛県の北西部に位置し、その源流を愛媛県西予市の鳥坂峠（標高460m）に発し、宇和盆地、野村盆地、大洲盆地を貫流し、伊予灘に注ぐ愛媛県一の大河川です。肱川は、その名が示すように中流部で‘ひじ’のように大きく曲がっており、河川の延長は103kmあるのに対して、源流から河口までの直線距離は、わずか18kmしかありません。肱川は、大洲盆地に入ると勾配がゆるくなるため流れが弱くなり、洪水氾濫が昔から頻発していました。

アクセス 五郎地区堤防（肱川）

- JR伊予大洲駅より北東へ直線距離約1km
- 大洲市五郎
- 緯度経度 北緯33度31分36秒，東経132度33分10秒



今は堤防ができていますが、昔は地盤も低いし、護岸^{こがん}を痛めんように、竹藪^{たけぶ}を生やしておったんですよ。堤防がなかったから、川の水位が上がると、氾濫してこっちの土地の水位も川と高さが変わらんようになりました。

昭和一八年（一九四三）の時には家の二階まで水がつかまりました。本家が直線距離で一〇〇メートルほどの山手にあつて、親父が舟に乗せてくれたのを覚えてます。でも、うちも二階建ての家だったから、下が浸かっても上で居れる状態だったんで、そう何度も本家に避難することはありませんでした。

しかし、昭和二〇年の時には、本家に避難することになりました。親父は兵隊に行っておりませんでした。今の堤防がある所に家があつて、その裏の物置に水がいたら舟が浮くようになっていたんで、私が舟を出したんですが、子供だったからようあやつらなんだですよ。

堤防ができる前までは、年中行事みたいに浸かっていました。昭和一八年、二〇年だけじゃなくて、時々舟を出すことはあつたですよ。

同じ五郎でも下が低いので、下から順々に水が来るんですよ。「来たな」という感じですよ。下と比べるのと、ここが浸かるまでは若干時間的には余裕があるんです。そのうち下からだけでなく、上流からも水が来て家の前辺りで合流し出して、やがて川と一緒にみたいになるんですよ。その時代には父が「五郎では住めんようになりそうだな。高い所の人はいえわな」と言っていました。

昭和二〇年代以前